



TITLE:

## 社会研究部門(I 研究所の概要)

AUTHOR(S):

川村, 俊蔵; 河合, 雅雄; 東, 滋; 鈴木, 晃; 森, 梅代; 足  
沢, 貞成

---

CITATION:

川村, 俊蔵 ...[et al]. 社会研究部門(I 研究所の概要). 霊長類研究所年報  
1976, 6: 12-14

ISSUE DATE:

1976-11-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162726>

RIGHT:

定の間隔を好むかあるいはランダムに変化される間隔を好むか、どちらかのスケジュールがより好まれた場合、両者の機能的等価の程度が、concurrent chain スケジュールの方法により求められた。ニホンザルの餌に対する心理的距離の尺度を構成することが本研究の目的である。

### 3) 行動と脳の関係についての研究

小 嶋 祥 三

昨年度にひきつづき眼球位置を行動的に制御した条件下で、視覚刺激の物理的、行動的属性を変化させ、前頭前野ニューロン活動との対応関係を検討した。また反応のトポグラフィとニューロン活動の関係も調べた。

### 4) 時間弁別と選択行動に関する研究

浅 野 俊 夫<sup>3)</sup>

基本的な強化スケジュールの研究を終えたので、とくにサルの特性を検出するために、時間の弁別およびより高次の弁別刺激に対する選択行動について、検討がすすめられた。

### 5) ニホンザル少数群における社会的行動と個体間関係

A・タルタビーニ<sup>4)</sup>・室伏靖子

ニホンザル実験群の観察室における社会的活動が、とくに個体差と個体間関係に注目して分析された。

## 総 説

### 1) 室伏靖子(1975): 比較心理学の方法。心理学研究法

1. 方法論(八木晃編), pp. 110—126. 東京大学出版会

### 2) 室伏靖子(1975): 心理行動—学習と迷信行動—。

臨床科学, 11: 497—502。

## 論 文

### 1) Murofushi, K. (1975): Variable criterion analysis of simple reaction time distributions in normal, chiasm-sectioned and chiasm-callosum-sectioned monkeys (*Macaca mulatta*). *Ann. Animal Psychol.*, 25: 1-17.

### 2) Asano, T. (1976): Some effects of a discrete trial procedure on differentiation learning by Japanese monkeys. *Primates*, 17: 53-62.

### 3) 浅野俊夫(1975): ニホンザルにおける体重統制。

動物心理学年報, 25: 131—134。

### 4) 浅野俊夫・熊崎清則(1975): チンパンジーにおける点灯および消灯オペラント。

動物心理学年報, 25: 35—42。

### 3) 昭和50年7月より米国カリフォルニア大学サンディエゴ校に留学中

### 4) 国費留学生

## 学 会 発 表

### 1) 切断脳ザルにおける反応時間分布の分析

室 伏 靖 子

日本心理学会第39回大会(1975)

### 2) Reward related visual stimuli: single unit recording in monkey prefrontal cortex (PFC).

Kojima, S. and Tobias, T.

1st European neurosciences meeting (1975)

## 社会研究部門

川村俊蔵・河合雅雄

東 滋・鈴木 晃

森 梅代・足沢貞成

## 研 究 概 要

### 1) ニホンザルの分布とその変動に関する研究

川村俊蔵・東 滋

鈴木 晃・足沢貞成

京都、兵庫、滋賀、和歌山、三重、岐阜、宮崎のニホンザルの分布の現状について、一次資料の集積をおこなっている。

岐阜、宮崎両県と東北地方の南部などの天然林地帯について、ニホンザルの分布像の形成過程—多くは地域個体群の衰退史である—をたどった。

### 2) ニホンザルの社会生態学—とくに自然群の環境利用とグルーピング・社会構造

東 滋・足沢貞成

ニホンザルの群れの連続した分布をゆるす環境で、遊動する群れがしめす生活と社会現象をとらえなおすために屋久島と下北半島西部の地域個体群について継続的な調査を行なっている。

### 3) ニホンザルの個体群の生活の維持に対する森林施業その他の human impact の影響の生態学的研究

東 滋

ニホンザル個体群の地域構造や生活のたてかたに与える人為営力の作用を生態学の文脈においてとらえる。もっぱら \*自然、の側の反応を異なる形式あるいは程度で人為の加わった地域間の比較と同一地域の時系列的変化の追跡により把握しようとする。下北半島の北西部・南西部の2つの地域個体群についての個体群変動の追跡と岐阜県下の天然林地帯と \*森林開発、のすすんだ地域の予備的調査を行なった。

また平行して、おなじ環境変化がニホンザル以外の森林哺乳動物に与える影響についても調査をすすめている。

### 4) ニホンザルの地域個体群のあり方

鈴木 晃

上信越地方を中心として、ニホンザルの地域個体群の土地利用、個体群動態、遊動におけるスペーシングの問題、オスの群れの離脱等に関する社会関係等の調査およびとりまとめを行ってきた。

- 5) 東アフリカにおける各種霊長類の社会学・生態学的研究のとりまとめ

鈴木 晃

- 6) メンタウェイ諸島における4種のサルの上学的研究

川村俊蔵・渡辺邦夫

1974.10—1975.3 までインドネシアのメンタウェイ諸島の中のシブルット島において行なった「東南アジアにおける霊長類の比較上学的研究」の成果のとりまとめを行なった。

- 7) エチオピアにおけるヒヒ類の研究

河合雅雄

1975年8月12日から76年1月10日まで、エチオピアでヒヒ類の研究を行なった。セミエン地方で個体識別をしたゲラダヒヒを対象に、コミュニケーションの研究を行なった。また、ゲラダヒヒとアヌビスヒヒ、マントヒヒとアヌビスヒヒの hybrid の分布の広域調査を行ない、後者2種の hybrid 社会の研究をアワッシュで行なった。(文部省科学研究費海外学術調査による研究)

- 8) ゲラダヒヒの生物上学的研究

森 梅代

エチオピア高地セミエン国立公園で50年10月から51年3月まで現地調査を行なった。これは48年度に行なった調査の継続である。前回主な対象とした E-herd (107頭)の個体識別を復元し、連続追跡を行なった。またこれに隣接する A-herd (約250頭)も観察し、one-male unit の life cycle について考察した。(文部省科学研究費補助金海外学術調査による)

- 9) 野生獣類の保護と農林業への被害防除の基礎的研究

川村俊蔵・東 滋

和泉 剛・伊藤美恵子

中村克哉を代表とする上記研究において、ニホンザル・タヌキ・キツネの研究を行ない農林業との関係および生態学的管理方法の研究を行なった。またアカネズミ・ヒメネズミについて同様な研究を行なった。

- 10) 房総半島の翼手類の季節的移動と集団のなりたちに関する研究

鈴木 晃

各地にちらばる複数の洞穴に居住する翼手類、ユビナガコウモリ、キクガシラコウモリ、コキクガシラコウモリの調査を、1958—1961に引き続きマーキングをほどこして再開した。

総 説

- 1) Kawamura, S. (1975): The present situation of Japanese monkeys and consideration of their conservation. In *Proc. Symp. 5th. Cong. Int. Pri. Soc.*, 501-508.
- 2) Kawamura, S. *et al.* (1976): Some consideration of conservation of nature in Sibrat Island. (manusc. paper. 1-20)
- 3) 川村俊蔵 (1976): 野猿公苑の問題点と将来, 自然第31巻第1号
- 4) 東滋ほか (1976): ツキノワグマ 調査報告 (1975年度) 手稿, 岐阜県企画部

論 文

- 1) Kawai, M., S. Ando & A. Muzuno (1975): A quantitative study on the activities of the forest-living monkeys in the Kibale Forest of Uganda by using a radio-telemetrical technique. *Kyoto University African Studies*, IX, 1-20.
- 2) Kawai, M. (1975): Precultural behavior of the Japanese monkey. *Hominisation und Verhalten* (ed. Kurth und Eibl-Eibesfeld): Gustav Fischer Verlag, Stuttgart. pp. 32-55..
- 3) 河合雅雄 (1976): ゲラダヒヒ, サルからヒトへ (ホミニゼーション研究会編), 別冊サイエンス: 62—77, 日本経済新聞社。
- 4) Suzuki, A. (1975): "The origin of hominid hunting: A primatological perspective" In *Socioecology and Psychology of Primates*, R. H. Tuttle, (ed.) Mouton Publishers, The Hague/Paris. pp. 259-278.
- 5) 鈴木晃, 和田一雄, 好広真一, 常田英士, 原莊梧, 油田よし子 (1976): 横湯川流域に生息するニホンザルの個体群動態と群れの動態, 生理生態16(1)
- 6) 鈴木晃 (1976): 霊長類社会の多様性, 別刷サイエンス, 特集動物社会学, サルからヒトへ, 22—35頁, 日本経済新聞社。
- 7) Mori, U. & M. Kawai (1975): Social relations and behavior of gelada baboons. -Studies of gelada society (II) In *Contemporary Primatology*, S. Kondo, M. Kawai and A. Ehara (eds.) Karger Basel. pp. 470-474.

報告その他

- 1) 鈴木晃 (1976): \*ニホンザルの餌づけ、の問題点, いんふおめいしょん, サイエンス 6 (3)46—47.
- 2) 伊谷純一郎, 河合雅雄, 鈴木晃, 藤岡喜愛 (1976):

座談会 \*サルからヒトへ、別刷サイエンス、特集動物社会学、118-136頁。

- 3) 東滋：岐阜県カモシカ生態調査報告書、1975年度。
- 4) 東滋：ニホンザル個体群の維持に対する森林施業の影響—下北半島の例から—

## 学 会 発 表

- 1) ゲラダヒヒの社会(I)

河 合 雅 雄

日本アフリカ学会第12回学術大会 (1975)

- 2) テレメトリ法によるサル類の行動解析

河 合 雅 雄

第22回日本生態学会大会 (1975)

- 3) 下北半島におけるカモシカの生息密度の変動 I, 下北半島西南部の場合

東滋・森治・和田久・足沢貞成  
宮木雅美・大竹勝

日本哺乳動物学会 (1975)

- 4) ゲラダヒヒの社会(II)

森 梅 代

日本アフリカ学会第12回学術大会 (1975)

## 変異研究部門

野沢 謙・和田一雄  
西邨顯達・庄武孝義

## 研 究 概 要

- 1) ニホンザルの集団遺伝学的研究

野沢 謙・庄武孝義

ニホンザルの血液蛋白の構造を支配する遺伝子の変異を電気泳動法によって検索し、群内、群間の変異性を定量化する。昨年度までにニホンザル約40群、総個体数約1,500頭の血液試料について、27種の蛋白の構造を支配する計29遺伝子座の検索をおこなった。このデータをもとにして、統計的検討を加え、繁殖単位間の毎代の移出入率、遺伝的変異の散布範囲などについて定量的推定を行い、ニホンザルの繁殖構造を解明すべく作業続行中である。

- 2) *Macaca* 属サルの系統的相互関係

野沢 謙・庄武孝義

ニホンザルを含む *Macaca* 属サル 各種から採血をおこない、上記 1) と同一の方法によって種内、種間の遺伝的変異性を定量化し、それら種間の遺伝子構成上の差を遺伝距離で表現し、それに数量分類学的手法を適用して枝分れ図を描く。それにより種間の近縁関係、分化時間の推定等をおこなう作業を目下続行中である。

- 3) ニホンザルの先天的四肢奇型への遺伝学的アプロー

チ

野沢 謙・庄武孝義

ニホンザルの数多くの餌付け群に多発する先天的四肢奇型が遺伝的支配を受けているか否かを明らかにすべく研究が続行されている。集団の奇型出現の家族集積性のデータから統計遺伝学的手法を用いて遺伝率の推定をおこなう他、淡路島野猿公園の協力を得て、交配実験をおこなっている。

- 4) 家畜化現象と家畜系統史の研究

野沢 謙・庄武孝義

在来諸家畜とそれらの野生原種の遺伝学的野外調査によって、家畜化現象そのものの集団遺伝学的解明と、個々の家畜種内で地域集団間の遺伝的分化の程度、系統的相互関係の解明を行ないつつある。1974年度のマレーシア調査の成果を庄武が1975年4月日本畜産学会において発表した。

- 5) エチオピアにおけるマントヒヒとアヌビスヒヒの種間雑種に関する遺伝学的研究<sup>1)</sup>

庄 武 孝 義

1975年8月より1976年3月まで海外学術調査 \*エチオピアにおけるヒヒ類の種間関係、特に雑種の比較研究、の隊員として参加し、アワシユ地区でマントヒヒとアヌビスヒヒの雑種の実態を遺伝学的に明らかにするため、マントヒヒ、アヌビスヒヒ、それらの雑種と思われるものの約400頭の採血を行ない、血液を日本に持ち帰った。目下この血液を用いて電気泳動法により、マントヒヒ、アヌビスヒヒ、それらの雑種の遺伝子構成を明らかにするために、実験を行ないつつある。

- 6) 志賀A群総合調査の組織化

和 田 一 雄

われわれはこれまでの生態研究成果の上に生理・形態・集団遺伝・繁殖生理等の諸分野から寒冷適応の実態を明らかにする研究を組織したが、その一部を分担した。

- 7) 志賀C群の冬の冬期の遊動

和 田 一 雄

志賀高原でもっとも標高の高い地域に分布するC群の気象・植生との関係を調査した。同時にC群の保護運動にも加わった。

- 8) ゼニガタアザラシの分布調査

和 田 一 雄

哺乳類研究グループ海獣談話会の調査を分担した。

- 9) ネパールにおけるアカゲザルとヒマラヤンラングールの生態地理学的調査

和 田 一 雄

1972年度のインドにおける同種の調査の継続として行

- 1) 河合雅雄、岩本光雄、森梅代、菅原和孝との共同研究